

2021年11月13日(土)に日本中東学会第27回公開講演会「中東の都市探訪——歴史と文学から」がオンラインで開催された。COVID-19の世界的な流行により観光のために中東地域へ渡航することが難しくなっていることに鑑み、本講演会では5人の講演者が各自専門とする地域の「都市」を切り口にそれぞれの地域の魅力を伝えることが企図された。以下、当日行われた講演の内容について簡単に振り返る。

熊倉和歌子氏の「寄進がつなぐ都市とひと：中世カイロの歴史建造物を歩く」では、マムルーク朝第8代王のカラーウーンによる寄進施設を題材に、カラーウーンVRプロジェクトによる映像資料を利用しながら、建造物の様々な見どころについて当時の歴史的背景や現在との結びつきとともに解説された。ワクフなどの基礎知識に関する平易な解説が行われたあと、廟のミフラブをはじめとする建造物の荘厳な装飾や、礼拝堂の柱の柱頭から見えてくる古代エジプトの建材の再利用、高い水準の医療サービスを提供し紆余曲折を経て眼科として現在まで続く医療施設といった内容が、VRによる立体的な映像や絵による当時の状況の再現を通じて提示された。全体を通してカラーウーンの寄進施設の歴史的な意義を紙面上の知識としてだけでなく視覚的にも理解することができ、臨場感のあふれる講演であった。

柳谷あゆみ氏の「『バグダードのフランケンシュタイン』のバグダード」では、アフマド・サアダーウィーの小説『バグダードのフランケンシュタイン』を題材に、小説における描写を通してバグダードやそこで暮らす人々の様子が紹介された。本小説はSF小説であると同時に、舞台となったイラク戦争直後(2005年)の政情不安なバグダードにおける人々の日常が詳細に描かれていることが説明され、主人公である「名無しさん」や主人公を取り巻く人々の様子が多様な人々が集積しては去っていく「つぎはぎの」バグダードを反映していること、また「名無しさん」のあり方にバグダードの人々の平和な日常生活へのあこがれと現実への絶望が示唆されていることが提示された。小説の内容を中心としつつもそのストーリーにはほとんど触れられなかったことで、バグダードという現実の都市のみならず本小説への興味も喚起する内容であった。

澤井一彰氏の「西から東から：食文化に見るイスタンプルの多文化共生」では、冒頭にトルコ各地での食事と飲酒の風景についての映像を通じてその多様性が示されたうえで、イスタンプルにおける食文化がメイハーネ(居酒屋)の観点から紹介された。オスマン帝国下では都市人口の半数以上を非ムスリムが占めていたこと、またトルコ共和国下で世俗主義の方針が採用され国家が酒類の流通や販売を管理する専売法が施行されたことから、現代のトルコではムスリムが多数の国でありながら飲酒文化が残っており、メイハーネで酒を飲みながら人と交流することができる。このメイハーネで酒と共に飲まれる前菜は、様々な地域に起源をもつ多種多様な料理であることが、具体的な料理とその写真を通じて説明された。軽快な語り口と共に繰り広げられた料理(の説明と写真)の数々は、聴者の食欲と飲酒欲を十二分に誘うものであった。(以上報告：東京大学大学院博士課程 上野祥)

休憩をはさみ、後半の公演はテヘランとエルサレムに関するものだった。

藤本優子氏の「望郷：小説にみる変わりゆくテヘラン」では、テヘランという大都市を小説によって、また「望郷」と「移住」をキーワードに、テヘランの成り立ちや人々との関わりが描かれた。テヘランの標高差がある地理を踏まえ、水資源が豊富な北部と少ない南部の経済的格差、市域・城壁が何度かの人口流入などを経て拡大してきた歴史が説明された。パフラヴィー朝では都市を貫く大規模道路の建設などもあり、イスラーム革命後も人口の流入が続き、現在では多様な人々が移住して形成された都市であることが示された。他方テヘランはそのメガシティとしての性質のため、小説では欲望渦巻く大都市という側面、またそのカフェに通った知識人たちや芸術家たちを描く題材にもなるなど、多様な顔があることも指摘された。そしてゾヤ・ピールザードの『ハーモニカ』とゴリー・タラッキーの『父』の2小説を主に取り上げ、登場人物たちの居住地域や国外への移住、また都市内部を貫くヴァリーアスル道路を登場人物たちが通過し、テヘランの様々な地域が描かれることで見えてくる都市内部の経済格差などが説明された。こうした雑多な人々が、居住地域が反映する分断・経済格差の中で織りなす「共存」と、「移住」の結果としての「望郷」を明らかにし、テヘランでの生活や雰囲気が生き生きと示されたことで、当地を旅行したいと思う意欲が刺激された。

臼杵陽氏の「聖地エルサレムの春祭り：預言者モーセ廟を巡って」では、パレスチナ西岸地区にあるナビー・ムーサー廟で行われる春祭りを題材に、パレスチナ人、特にエルサレムの人々の生活・習俗と、それが時の政治情勢によって大きく影響を受けてきた様子が説明された。ナビー・ムーサー廟はその名の通り、預言者モーセの墓地とムスリムに信じられており、長く周辺のパレスチナ人から崇拝、春の祝祭の場であった。しかし1920年4月、この春祭りでのユダヤ人との衝突から、大規模な反英・反シオニスト反乱を引き起こし、長くこの祭りは禁じられてきた。祭りはエルサレムの名望家（アーヤーン）フサイニー家が主催していた事実からも、パレスチナ人には重要な祭りであったことが示唆された。興味深いことに、1906年にエルサレムを訪れた徳富蘆花がこの春祭りをエルサレム旧市街のヤッフォ門付近の宿から眺めたことは、日本とエルサレムの関係の一側面であろう。1993年のオスロ合意以降、春祭りは復活し、今日まで実施されている。ユダヤ教の過ぎ越しの祭り（ペサハ）、キリスト教の復活祭と同時期に行うことから、土着の祝祭でさえ政治的意味を不可避免的に含む、パレスチナの複雑な情勢が反映されている。本報告文執筆者も、パレスチナ人の友人にこの春祭りについて尋ねた時、子供の頃（2000年代初頭）に行ったことはあるものの、近頃は訪れたことはなく、その理由はイスラエルの占領政策によって訪問が難しくなったためと答えていた。本報告によって、一つの春祭りの政治的情勢による困難な状況を感じたのと同時に、エルサレムの人々にとって地元の祝祭があるナビー・ムーサー廟へ訪問してみたいという欲求が大いに沸きあがった。（以上報告：東京大学大学院博士課程 澤口右樹）